日本ペルー外交関係樹立 150 周年に際しての佳子内親王殿下のペルー御訪問

山倉 良輔（在ペルー大使館 参事官）

佳子内親王殿下のペルー御訪問

2023 年が我が国とペルーとの外交関係樹立 150 周年にあたることに鑑み、ペルー政府より招待を受けた佳子内親王殿下は、経由地の米国ヒューストンでの機材の不具合で、予定より 1 日遅れの 11 月 2 日深夜、ペルーに到着された。帰国のためにペルーを出発される 9 日未明まで、ペルー滞在日程が 1 日短縮されたことで、実質 11 月 3 日から 8 日までの 6 日間の滞在日程の中で、2 日に実施予定であった諸行事も、この期間に再設定された。当初から予定されていた全ての行事を、精力的にこなされる中で、その振る舞いと笑顔は、我々ペルー在留邦人、日系人、関係機関のペルー人のみならず、多くの一般ペルー人の記憶にも強い印象を残す素晴らしいもので、我が国の皇室が行われる国際親善の重要な 1 ページとなった。この証左として、当地報道でも「微笑みのプリンセス」や「日本版キャサリン妃」というような形容がなされていた。

日本とペルーの外交関係の開始

1872 年に中国人労働者を乗せたペルー船舶が悪天候で横浜港に寄港したことがきっかけとなり、150 年前の 1873 年 8 月 21 日に、我が国が、ラテンアメリカ（中南米）で最初の外交関係をペルーとの間で結ぶこととなった。ペルーにとっても現在も続くアジア諸国との間での初の外交関係樹立であった。1873 年は、我が国は明治天皇、ペルーはマヌエル・パルド大統領が国家元首の時代で、日本での外交関係締結交渉のため、パルド大統領の命を受けたガルシア特命全権公使が訪日し、副島種臣外務卿との間で、外交関係樹立のための「日本国秘魯国和親貿易航海仮条約」に調印した。明治天皇は、ガルシア公使へ「大壺」を、パルド大統領に「手元箪笥」を御下賜品として贈ったが、佳子内親王殿下の御訪問に合わせ、当館がこの日本ペルー外交関係樹立 150 周年記念式典のために、これら御下賜品の所有者である末裔と交渉し、この写真をパネルとして制作した。150 年の時を超えて、明治天皇の子孫である佳子内親王殿下に、ペルー外交の中心として、外務大臣が執務する外務省トーレタグレ宮で、11 月 3 日の 150 周年外務省歓迎記念式典の機会に、ご覧いただけたことは感慨深いものであった。

写真 1　外務省主催外交関係樹立 150 周年式典（アンディーナ通信社提供）

外交関係樹立 150 周年記念行事

2023 年の日本とペルーの外交関係樹立 150 周年記念行事は、2 月の開会式典と、これに先立つ我が国からの計 95 台の救急車の供与から始まった。救急車の供与式は、11 月 7 日の佳子内親王殿下の大統領表敬場所と同じ大統領府で、ボルアルテ大統領やヘルバシ外相（当時）の出席の下で行われた。ボルアルテ政権における初の諸外国からの外相以上のレベル（大統領、首相及び外相レベル）の訪問が林外相（当時）であったが、諸外国からの王室もしくは皇室のペルー訪問も佳子内親王殿下が初であった。2 月の開会式典から、佳子内親王殿下の御訪問まで、4 月の日秘友好の日の式典、5 月の林外相（当時）の訪問、7 月の我が国海上自衛隊練習艦隊のペルー寄港、条約締結日の 8 月 21 日に合わせた記念式典及び記念コンサートの実施、記念硬貨や記念切手の発行等合わせて 150 を超えるイベントをペルーにおいてこの 1 年間で実施した。

昨年（2022 年）12 月にカスティージョ大統領（当時）が罷免されたことで、副大統領から大統領に昇

格したボルアルテ現大統領の政権に対しては、当初約2か月に及ぶ抗議活動が続く毎日で、欧米諸国のみならず、近隣の中南米諸国でさえ、支持基盤を有さない同政権の存続は厳しいと判断したのか、外相レベル以上の要人のペルー訪問は、前述の通り5月の林大臣まで待つこととなる。カスティージョ前政権は、基盤となる左派政党の上に樹立された政権であったが、ボルアルテ政権は、支持基盤がないため固定の支持者は多くはない一方で、支持率は低いものの、逆に全ての政治勢力や市民団体等との対話の姿勢を見せているので、2026年7月の任期終了まで政権は維持される可能性が高いと当館は判断し、日秘外交関係樹立150周年もペルー現政権との全面的な協力関係の下、種々の事業を推進してきた。

佳子内親王殿下の御訪問の意義

佳子内親王殿下の御訪問の意義は、第二次世界大戦前後の排日運動や外交関係断絶という一時期を除き、伝統的友好関係にある150年間の我が国とペルー関係を再確認し、これから先の150年もさらに深化させることを約束するような意義があった。11月3日の佳子内親王殿下のペルー日系人協会におけるお言葉には、「日本から移住された方々とそのご子孫が、その後、幾多の困難や哀しみを乗り越え」という部分があったが、排日運動や外交関係断絶という、この苦難の時期を乗り越え、65年前の1958年に我が国要人としてペルーを訪問なされたのが、三笠宮同妃両殿下で、我が国初の総理のペルー訪問である翌1958年の岸総理の訪問に1年先立つものであった。三笠宮同妃両殿下が65年前に御訪問され、今回佳子内親王殿下も御訪問された、「団結」を意味する「ラ・ウニオン運動場協会」には、三笠宮同妃両殿下の御訪問を記念して命名された「ミカサ・サロン」と呼ばれるサロンが現存している。この後も、主要な我が国皇室のペルー訪問は両国の外交や移住関係の節目の年に行われ、1967年には、佳子内親王殿下の祖父にあたる現上皇上皇后両陛下が皇太子同妃殿下時代に、現在もペルー日系人協会の本部が置かれ、佳子内親王殿下も御訪問なされた「日秘文化会館」の開館式に出席されることも目的にペルーを御訪問されている。そして、2013年8月の外交関係樹立140周年と2014年4月の移住115周年の中間にあたる2014年1月に、佳子内親王殿下のご両親の秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御訪問、そして、2019年の移住120周年に際しては、

写真2　ペルー日系人協会主催150周年記念式典（ペルー日系人協会提供）

写真3　日本人ペルー移住100周年記念碑御献花（ペルー日系人協会提供）

眞子内親王殿下（当時）の御訪問と、皇族方のペルー御訪問は、世界の趨勢に影響されることなく継続的に行われてきた。今次の佳子内親王殿下の御訪問は、外交関係樹立150周年の最後のワンピースとして、両国の友好信頼関係の証左の御訪問となった。

ペルー側の歓迎振り

11月3日の御訪問最初の行事であった日系人協会御訪問と、同日午後の日系二世の神父が設立したエンマヌエル協会が運営する医療施設と高齢者施設を御訪問された際には、唯一ご存命の一世の方や高齢者、多くの日本人の血を引く日系人と歓談されたが、歓談された方々からは、「はるばるお越しいただき本当にうれしいです」との声や、佳子様の目を見つめながら、固く佳子様の手を握りしめる姿が多々見られ、退出時に見送りにきた日系校の生徒とのハイタッチには、大きな拍手と歓声があがった。もちろん、会場の日秘文化会館の外にも、多くのペルー人が集まり、佳子内親王殿下に、「プリンセス!」、「佳子!」等の声をかけ続け、これに対し内親王殿下も、「微笑み」と「お手を振り」で応えていた。この光景は、4日及び5日に御訪問された世界遺産のマチュピチュやクスコでも見られたものであり、特にマチュピチュ

村役場前において多くの村民が熱狂的に歓迎した。

クスコ御訪問から戻られた6日の、経済的理由で中等教育（5年生中学）以上の教育を受けられない社会的弱者の女性を対象として職業訓練を行う生産的技術教育センター、ろう学校（初等特別支援学校）、さらには我が国が無償資金協力で建設しリハビリ用機材を供与した日・ペルー友好国立障害者リハビリテーションセンターを御視察なさった際にも、予定時間を遙かに超えて、特にろう学校ではペルー手話（スペイン語を公用語とする国の間でも手話は異なる）を使って交流を行っていたが、これらの施設でも大歓迎を受けたことは言うまでもない。

6日には、国際協力機構（JICA）帰国研修生同窓会員及び文部科学省帰国留学生協会員との御引見並びにJICAボランティア専門家及び在留邦人代表との御接見も行ったが、前者は、ペルー人として現在両国の架け橋となっている方々であり、後者は日本人として両国の架け橋のみならず、両国関係の活性化や深化に、経済及び国際協力の面から貢献されている方々である。邦人の御接見者の中には、手話で佳子内親王殿下に話しかける者もおり、手話でお言葉などを述べる佳子内親王殿下のお姿に感銘を受けていたことがうかがわれる。

7日には、ボルアルテ大統領を表敬訪問されるとともに、同大統領主催で双方10名ずつ計20名参加の午餐会に出席されたが、ペルー側は首相、法務人権相及び女性社会的弱者相も出席するなど、政府からも大歓待を受けた。特に日系人であるアラナ・イサ法務人権大臣は、午餐会のみならず、この直前の表敬訪問にも希望されて同席していた。

また、ペルーを御訪問なさった皇族は、多くの日系人が就学する日系校を訪問なさっていたが、これまで我が国皇族が日本人学校を訪問されたことはなく、今回は創立55周年（1968年創設）を迎えた同校を皇族として初めて8日に御訪問されたが、ここでも生徒から日本国旗の小旗で迎えられ、全校生による合唱や和太鼓演奏を鑑賞された後、生徒全員とハイタッチして退場されるまで、少ない生徒ながら熱気あふれる交流を行った。

同じく8日の出発前には、日系人が創設した「ラ・ウニオン学校」と「ラ・ウニオン運動場協会」を訪問し、生徒や日系人の熱い歓迎を受けた。後者においては、1953年の創立から70周年を記念する式典に御臨席され、退出の際には会場となった陸上競技場のトラックから、観客席につめかけた1000人近くのたくさんの人々に丁寧に微笑と手を振って応えた。佳子様が競技場から退出しても、興奮冷めやらぬ人々が長く余韻に浸っていた。

写真4　ボルアルテ大統領表敬訪問（宮内庁提供）

次の150年へ

佳子内親王殿下の御訪問は、これまでの25年という四半世紀どころか、50年という半世紀毎の外交関係周年という節目の年で、初めての皇室の御訪問であり、これまでの素晴らしい150年間の両国関係を振り返り、且つ友好親善・協力関係を再確認することができた。これに加えて、世界のグローバリゼーションの中で取り残されている社会的弱者という我が国とペルーの両国も抱えている大きな課題を再認識させ、更にどのように接し対応していくべきかというテーマに焦点を当てた御訪問でもあった。今回の佳子内親王殿下が御訪問なされた我が国が無償資金協力等で建設や機材供与を行った国立障害者リハビリテーションセンターやエンマヌエル協会は両国の協力関係の証で、多くの日系人も裨益しており、また、ペルー側が独自に建設運営している生産的技術訓練センターやろう学校は社会的弱者支援の代表的な施設であり、弱者を励ます内親王殿下の振る舞いは、受益者を心強くするものであった。また、今次御訪問は、150周年の6分の5の歴史である明年125周年を迎える日本人ペルー移住の歴史を再確認し、また、ペルー日系人協会員とも意見交換を行っていただいたことは、次の150年に向け、皇室、政府そして民間が協力して、新たな歴史を作っていくためのローンチともなった御訪問であった。

（やまくら りょうすけ　在ペルー日本国大使館 参事官）